5

ロンドン塔は「塔」と呼ばれてはいるが、実際は「城塞」である。天守閣に当たる中央のホワイト・タワーを中心に、複数の館、塔と砦、敷地を囲む二重の城壁、さらにそれらを囲む堀を備えている。

アーサーが操る《シュテイン》は、西側の門からロンドン塔への突入を敢行した。

城門を正面から突破する形だが、ロンドン塔は閉鎖中とはいえ管理する人間の出入りはあるため、門扉が閉ざされてない。道を塞ぐ鉄柵が置かれ、鎖で封鎖されているだけだ。自動機巧人形（アウトマタ）のパワーと機動力を持ってすれば、突破するのは難しくなかった。

アーサーは、ミドル・タワーの門を抜けて堀を越える石橋を渡り、バイワード・タワーの門から二重になった城壁の間に入る。左右を城壁に挟まれた石畳の通路（ウォーター・レーン）を、《シュテイン》は軽快に走った。

「くっ！　予想以上に、揺れが、酷い！」

アーサーはスコットランド・ヤードから密かに譲り受けた自動機巧人形（アウトマタ）を、丸二日かけて修理し、改造した。ただ、自動機巧人形（アウトマタ）の中枢とも呼べる《心電回路》には手を入れることができなかった。そのため、歩く、走る、腕を振るう、跳び上がる等々、機体の細かな動作制御は《心電回路》に任せて半自動化できるのだが、所有者（マスター）の命令を受けて行動に移ると言った真似ができない。そこで、こうして自動機巧人形（アウトマタ）の背中に操縦席を設け、そこに乗って直接操作しているのだ。

ただし、操縦席と言っても鉄枠とベルトで操縦者を固定する程度の簡易な物である。ほとんど機体にしがみついた状態で、複数あるメーターを管理し、レバーとハンドルで操作せねばならない。時間があれば有線なり無線なりで遠隔操作できるように改造したのだが、当然そんな余裕はなかった。

「これは、要、改善、だな……！」

それでも、サクラダイトで駆動する自動機巧人形（アウトマタ）の馬力は一級品だった。《シュテイン》は、人一人背負っているとは思えない軽快さで、石の通路を駆けていく。

しかし、当然ただ通り抜けることはできなかった。

「ーー来たかっ」

通路を走ると、左手に次の門があるブラッディー・タワーが見える。その門から、《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面を付けた二人組が飛び出して来た。

かと思うと、バキンッと《シュテイン》の肩に衝撃が走る。

銃弾が着弾したのだ。慌てて見上げれば、内側の城壁の上に、ライフル銃を構える人影が見えた。
「銃手(ガンナー)はさすがに仮面なしか。ならば！」
アーサーは《シュテイン》を操作し、城壁の上目がけて、用意していた機械を放り上げる。
最大光量のアーク灯。ほんの数秒だが、小型の太陽と見紛うばかりの光が炸裂し、城壁上の人影は悲鳴を上げてライフル銃を取り落とした。
ただ、不意を突いた目潰しも、仮面越しでは威力は弱い。
正面に立ち塞がる二人組は、左右から挟み込むようにして《シュテイン》に迫ってきた。自動機巧人形(アウトマタ)相手に生身で挑もうとはおよそ気が知れないが、さすがにいきなり斬りかかっては来なかった。
代わりに彼らが持ち出したのは、太いロープで編まれた投網だ。《シュテイン》目がけ、投網を投げかけた。絡ませて動きを封じるつもりだ。
「くそっ。猛獣扱いか！」
アーサーは毒づいたが、有効な手段だろう。
だが、打つ手はある。
「喰らえ！」
スコットランド・ヤードから譲り受けたのは、自動機巧人形(アウトマタ)本体だけではない。アーサーの操作で《シュテイン》は、右手で日本刀を抜刀。覆い被さる投網を両断し、拘束を逃れた。
同時に、左腕を伸ばして投網をつかむと、力尽くで振り回す。とっさに手を放し損ねた仮面の男が投網に振り回され、もう一人に衝突した。
アーサーは二人が倒れるのを見ると、追撃はせずに《シュタイン》を走らせた。彼は囮役だ。少しでも多くの敵を引きつけねばならない。
ブラッディー・タワーの門も、落とし格子は上がったままだ。アーサーは《シュテイン》を駆って通り抜け、城壁内に侵入する。
内側の城壁を抜けた先は、中庭のようなロンドン塔の中心部。四方は古い建造物に囲まれ、中央にはロンドン塔の中核を成すホワイト・タワーが聳えている。四隅に尖塔を備えるホワイト・タワーのさらに頭上には、夜空に散らばる雲、そして煌々と輝く月が見えた。
城壁内に侵入した自動機巧人形(アウトマタ)に、《ジャック・ザ・ナイトメア》たちがぞろぞろと姿を見せた。
仮面を被った秘密部隊の隊員たち。だが、その足並みは乱れていた。何しろ、完全に予定外の乱入者だ。
ここからが勝負である。

「よしっ。景気づけだ！」
アーサーは操縦席の足下に取り付けていた電気拡声器を切り離す。《シュタイン》の左脇に抱えさせ、コードを接続。コードが繋がる先は、取り出した《Eギター》だ。
「さあ聞け、次世代を切り拓くサクラダイトのビートを！」
アーサーはギターを掻き鳴らした。

＊

ギュイイィィィィィン――

「うわ。ほんとにやってる」
ロンドン塔に響き渡る聞き覚えのある騒音に、銀助は頬を引きつらせた。
大音量で聞こえてくるのは、アーサーが開発した《Eギター》の音色だ。ベーカー街で準備していたときは一体なんの冗談かと思っていたが、まさか本当に弾くとは。
「派手にやってるな。俺たちも急ぐぞ」
「ですね」
アーサーと別れたクラウスと銀助は、アーサーが突破したミドル・タワーとバイワード・タワーの門をコソコソとくぐり抜け、二重になった城壁の間に入った。ただ、その先は左に折れ、西側の城壁に沿って進んでいた。
旧王立コイン鋳造所の前を通り、ビーチャム・タワーの横を越え、一番端にあるレッゲス・マウントの手前まで移動する。そこで、右手に聳える内側の城壁を見上げた。
「さて、上手く行ってくれよ……」
クラウスが祈りながら用意したのは、さっき受け取った《Eロール》だ。それこそアーサーが突貫で作った、ロープの巻取機である。
土台になっているのは、かつて自動機巧人形（アウトマタ）に激突して破損した《Eバイク》。後輪の軸に動力部を直接取り付け、鉤爪の付いた車輪二つで挟んである。全体としての形は、トップハットサイズの糸巻き（ボビン）と言ったところだ。
《Eロール》に巻き付くロープの先端には、小型の制御装置が付いている。クラウスはロープを伸ばして制御装置を銀助に持たせた。それから城壁に《Eロール》を押しつけ、鉤爪を壁面に噛ませる。
本体の電源を入れた。
《Eロール》は軽快な動きで、一気に城壁を駆け上った。銀助が慌ててロープと制御装置を

握る手に力を込める。
あっという間に一番上の胸壁部分を乗り越えて、《Eロール》が城壁上の通路に落下。銀助が慌てて動作を止める。ロープを引っ張ってみたが、《Eロール》は胸壁に引っかかり、しっかりと固定されていた。
「これを登らなきゃならないんですね……」
「俺、昇進して結構偉くなったのになあ……」
二人は大いに嘆いたが、嘆きながらもロープを身体に巻き付け、制御装置を操作した。
ロープが巻き上がり、身体が持ち上がる。足が地面から離れるにつれ、それまで気にならなかった夜風が、胸をざわつかせた。
最初に銀助。続いてクラウスも、壁面に身体を擦られながら、なんとか城壁上の通路まで登り切った。二人とも、最後は顔面が引きつっていた。
「アーサーの台詞じゃないが、こういうのこそ、コナンの役回りだろうに」
「全くもって同感です。神経衰弱がぶり返しそうですよ」
だが、へたっている時間はない。二人は城壁内の様子を確認する。中庭に面した側は胸壁がないので、見つからないよう、ほとんど腹ばいになって城壁の下を見渡した。
中庭では、アーサーの乗る《シュテイン》が、仮面を付けた《ジャック・ザ・ナイトメア》たちに囲まれていた。
敵は、距離を開けつつ自動機巧人形（アウトマタ）を取り囲んで、動きを牽制しているようだ。城壁を登っているときもそれらしい音は聞こえていたが、銃を構え、発砲する者もいる。幸い背中に乗るアーサーは被弾していないようだが、背後から撃たれれば防ぎようがないのではないだろうか。
「うわ。《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面がいっぱいいる……説明されてても、実際に見ると心臓に悪いな……」
「しかも、みんな動きが機敏ですよ。本当に下手な軍隊より手強いんじゃないですか？」
「だな。アーサーの奴、囮としては合格だが、あれで大丈夫なのか？　敵さんがだいぶ優勢に見えるぞ」
「なら、急ぎましょう」
クラウスと銀助は降りる場所を探す。幸い、いま居る場所の真下に礼拝堂があった。セント・ピーター・アド・ヴインキュラ礼拝堂だ。あの裏側に降りれば、中庭からは死角になる。
「降りるときは、こいつを逆回転させればいいんだよな？」
「ええ。僕が行きましょうか？」
「……いや、今度は俺が先に降りよう。操作を頼む」
城壁からぶら下がっている間は、身の隠しようがない。銀助が着ている日本の着物よりは、

クラウスが着ているコートの方が、まだしも色合い的に目立たない……かもしれない。
クラウスの台詞に頷いた銀助は、再び胸壁に《Eロール》の鉤爪を引っかけて固定。ロープの端をクラウスに渡す。クラウスはまたロープを巻き付け直し、覚悟を決めて城壁から身を乗り出した。
制御装置を操作する。軸が回転し、ロープはスルスルと伸びながら、クラウスを地面へと降ろしていった。
「部下には言い訳できねえ格好だな……」
地面を見下ろしながら、クラウスは何度目かのぼやきを口にする。
と、そのときだ。
「ーーん？」
何かが聞こえた。鋭く短い、口笛のような音だ。だが、その発生源を探すより先に、ロープが地面に到達した。
両足で地面を踏みしめ、クラウスは大きく息を吐く。頭上を見上げ、顔をのぞかせる銀助に向かって手を振りながら、ロープを巻き取るよう制御装置を操作した。
ロープが再び巻き上がっていく。
しかし、銀助は顔を引っ込めない。
それどころか、こちらを見下ろす顔が青ざめている。
「警部！　後ろ！」
ぎょっとして振り向いた瞬間、視界の中にナイフの切っ先が飛び込んで来た。とっさに避けたが、切っ先は頬を掠め、細く赤い、血の線を引いた。
「なんてこった……！」
いきなりバレた。目の前にいるのは、仮面の《ジャック・ザ・ナイトメア》だ。クラウスは拳銃を抜き、銃口を突きつけるーーが、次の瞬間ナイフが閃き、銃を手から弾き飛ばされた。
「クソ！　武器なら他にも、アーサーから……」
クラウスは慌てて後退したが、それより早く、仮面の男とナイフが迫った。
ナイフの切っ先が月光を弾き、クラウスは間一髪、それを避ける。避けつつ、さらに後退。だが、後退した分を、仮面の男は即座に詰める。
しかも、男の背後にもう一人、《ジャック・ザ・ナイトメア》が現れた。二対一。クラウスから血の気が引いた。
脳裏に《ジャック・ザ・ナイトメア》の犠牲者たちの姿が過った。ずっと追い続けてきたーーこいつらがまさに「犯人」なのだ。そしていま、今度はクラウス自身が犠牲者の列に並ぼうとしている。

焦りと恐怖がクラウスの足を滑らせた。クラウスが体勢を崩し、しまった、と痛恨の念に駆られたときだ。

ふわり、と頭上から、何かが降ってきた。

＊

ギュイイィィィィンーー

「嘘だろ」

ロンドン塔に響き渡る聞き覚えのある騒音に、コナンは思わず絶句する。

間違いない。アーサーが開発した《Eギター》だ。しかも音量が壊れている。あいつ何しに来たんだ、と真剣に考えてしまった。

爆発音に続く銃声や破壊音のあとに、この騒音である。夜の静寂（しじま）など跡形もない。ロンドン塔がアーサーのコンサート・ホールと化していた。

「おのれ、ホームズッ。神聖な処刑場に、何を持ち込んだ」

憎々しく顔をしかめながら、ジャックが吐き捨てた。彼の様子を見る限り、少なくとも精神的な攻撃ーーというより嫌がらせだーーにはなっているらしい。

「この騒ぎではモリアーティも考え直しそうだな」

「お静かに。これ以上の戯れ言は聴きたくありません」

ジャックは苛立たしげに告げたあと、あえて靴底を鳴らしながら、廊下を歩いた。騒音のする方向。ホワイト・タワーの西側に向かう。部屋に入り、窓から中庭を見下ろした。

「……アーサー……！」

ジャックの脇から窓を見やり、コナンは熱いものが込み上げて来るのを感じた。

中庭を所狭しと自動機巧人形（アウトマタ）が駆け巡っている。呆れたことに、アーサーはその背中に張り付いていた。どうやら手動で動かしているらしい。

対する《ジャック・ザ・ナイトメア》の隊員たちは、自動機巧人形（アウトマタ）から適度に離れたまま、互いに連携して相手の動きを封じようとしている。まるで、獰猛な熊を取り囲む、猟犬の群れのようだ。

そして、《ジャック・ザ・ナイトメア》の連携は、功を奏しつつあった。

アーサーは必死に隊員たちを引っかき回そうとしていたが、いつしか逆に翻弄されている。隊員たちの波状攻撃を前に、《Eギター》も放り出し、防戦一方だ。

辛うじて持ちこたえているものの、長く保つとは思えない。

「アーサーー！」
思わず声をかけそうになった。だが、その瞬間、隣から向けられる氷の視線を察して、飛びだしかけた叫びを呑み込んだ。
自分がジャックの《ギアス》に掛かっていることは、ほぼ確実だ。何がきっかけで暗示が発動するかわからない以上、迂闊な行動を取るわけにはいかない。特に、ジャックの前では。
「……どうやら策もないまま、我武者羅に特攻して来ただけのようですね。彼の評価を見誤っていました。いくら《ナイトメア》とはいえ、直に鎮圧できるでしょう」
眼下の戦い見下ろして、ジャックは冷ややかに分析した。コナンは唇を噛んで拳を握り締める。
焦燥が胸を締め付けた。ビーコンを作動させたときからわかっていたことなのに、いざ駆けつけたアーサーの姿を見ると、巻き込んだ罪悪感で押し潰されそうになる。
だが、怯んでいる場合ではない。どうにかしてアーサーと合流せねばならない。せめて合図を送ることができれば。
だが、
「……ああ、なるほど。ミスター・ホームズは、囚役ですか」
剃刀のような眼差しで、ジャックがつぶやいた。
ジャックの視線は眼下ではなく、水平方向に向けられていた。視線を追ったコナンは、思わず呻き声をもらした。
ロンドン塔の西側。内側の城壁の上に、ふたつの人影がある。月明かりでもわかった。クラウスと銀助だ。アーサーだけでなく、あの二人まで乗り込んで来ていたらしい。
クラウスと銀助は中庭の様子を確認しつつ、慣れない手つきでロープを垂らしている。なんと、城壁をよじ登ってきたらしい。絶対にアーサーの発明品だ。なんという無茶をするのだろうか。
二人は中庭から見つからないよう、慎重に動いていた。実際、自動機巧人形（アウトマタ）を包囲する隊員たちは、誰も二人に気付いていない。ジャックの言う通り、派手に暴れるアーサーは囮で、あの二人がコナンを探す役割なのだろう。
しかし、大きな問題があった。確かに中庭からは見えないかもしれないが、ホワイト（こ）・タワー（こ）からは丸見えだ。
「煩わしい。これ以上、茶番に付き合うのは沢山です」
唾棄するように言うと、ジャックは窓の外に向かって短く指笛を吹いた。甲高い音は戦闘の騒音に紛れたが、自動機巧人形（アウトマタ）の包囲網の外にいた隊員二人が気付いて、反射的にこちらを見上げた。

「行け！」
その瞬間、ジャックの右目が怪しく光った。コナンが戦慄する。《ギアス》だ。こちらを見上げた二人の隊員が、全身を硬直させ、次いで背後へと駆け出した。
向かっているのは、礼拝堂の方向だ。
「くっ！？」
「お静かに」
歯噛みするコナンに、ジャックは霜の降りた鋼鉄の如き声で、ひと言だけ釘を刺した。
だが、今度は躊躇ってはいられない。
「ジャック！　ここまでだ。貴方に協力するから、もう誰も殺すな！」
「そのような取り引きは無効ですよ、ミスター・ワトソン。貴方が協力することは、すでに確定事項です」
「アーサーたちにも投降するよう呼びかける。だからーー」
「お話になりませんね。こちらが被った被害は、取り返しが付かない。まったく、無駄に足を引っ張ってくれたものです。こうなった以上、可及的速やかにイレギュラーを排除します」
ジャックは冷酷に断言する。コナンはとっさに、ジャックを無視して部屋から駆け出そうとした。
だが、それより早く、

ピューイッ！

突然、ロンドン塔に笛の音が響き渡った。

＊

ふわり、と頭上から、何かが降ってきた。
それが「何」か理解したとき、クラウスはとっさに銀助が身を投げたのかと誤解した。
だが、違った。降ってきたのは、服ーーニッポンの着物だった。いつも銀助が羽織っていた絣の着物。それが、クラウスと仮面の男の間に、ふわり、と落下してきたのだ。
落下してきた絣の着物が、クラウスの視界を遮る。仮面の男が、ビクッと動きを止める。
続いて、

ズザッーー！

と、城壁の中程の高さから、何かが着地した。
銀助だ。
そう認識した瞬間、着地した銀助の姿が消えた。少なくとも、消えたように見えた。
そして、瞬く間に、仮面の男の懐に出現した。
仮面を付けているのに、男の激しい狼狽が伝わる。かと思った次の瞬間には、男の身体の上下が逆転し、さら回転しながら礼拝堂の石壁に力の限り叩き付けられていた。
ドンッ！
と足下の地面までが、激突の衝撃に震えた。
「……おお、危ない、危ない。間に合わないかと思って途中で飛び降りましたが、だいぶ足が痺れました。警部？　怪我はありませんよね？」
いつもと変わらない態度で、ただ少し心配そうに、銀助がクラウスを肩越しに振り返る。
それは、残る一人の仮面の男を、まるで無視する仕草だった。
「銀すーー！」
クラウスが警告しようとしたときには、残る一人のナイフが、銀助の首筋に肉薄していた。
完全に、斬られたと思った。そうとしか思えないタイミングだった。
だが、刃が捉えたのは、腰を落とした銀助の頭髪だけだった。
よいしょ、という声が聞こえてきそうな自然な動きで、銀助は軽くしゃがみ込んだまま、残る一人へ腕を伸ばした。
銀助の腕の動きも、決して素早い印象はない。
しかし、野生の獣の如く素早い《ジャック・ザ・ナイトメア》が、その動きに反応できない。
銀助の手が、男の肩に触れた。そう思った瞬間、またしても、男の身体が縦に半回転した。
目の前で何が起きているのか、脳が理解できない。何かの冗談のようだ。
ドシッ、と男の身体が地面に叩き付けられ、衝撃で仮面が外れる。男は完全に意識を失っていた。壁に叩き付けられた方も、地面に崩れ落ちてピクリとも動かない。
「ぎ、銀助……お前さん……」
「やれやれ。ヒヤヒヤしましたが、なんとかなりましたね」
「ヒヤヒヤって……あっという間だったぞ？　余裕綽々じゃないか！　お前さん、そんなに強かったのか？」
「いえ、まあ、家の方針で嗜んでる程度です」
「嗜んでるって、いまのやつか？　知ってるぞ。ニッポンのバリツだな？」
『『ブジュツ』です。それに、余裕だななんて、とんでもない。相手は刃物を持ってたんですよ？

刃物を持った人間を相手にするっていうのは、それだけでヒヤヒヤするものなんです」
「そりゃ、普通はそうだが……」
クラウスは毒気を抜かれて、立ち尽くした。呆れ顔で首を振る。
「……自動機巧人形（アウトマタ）と言い、ニッポンの奴らは、少しおかしいんじゃないか？」
「それより、警部。コナン君を見つけましたよ」
「なにっ！？　どこで？」
「やっぱりホワイト・タワーです。さっき指笛が聞こえたでしょう？　上から見てたんですが、最上階の窓に人影がありました。コナン君と、もう一人。笛を吹いたのは、もう一人の方です」
「ひょっとして、アーサーが言ってた、指揮官のジャックか？」
「おそらく」
と銀助が頷いたときだ。

ピューイッ！

鳴り響く笛の音に、二人は仲良く身体を竦ませた。
「な、なんだ？　今度はなんなんだ!?」
「あ、まさか私たちが見つかったって合図でーー」
唐突に、銀助は言葉を切ると、氷の上を滑るような動きで、クラウスと体を入れ替えた。
クラウスはよろけて、「おいっ」と抗議しそうになったが、銀助の横顔を見て口を閉ざした。
《ジャック・ザ・ナイトメア》二人と対峙したときより、遙かに真剣な表情だ。そして気がついた。銀助は自らの背後に、クラウスを庇ったのだ。
そして、

「見つかったのは俺たちだ。もっとも、隠れる気もないんだが」

その言葉通り、一人の男が礼拝堂の裏に姿を見せた。
礼拝堂に隣接するウォータールー兵舎の裏手から、ゆっくりと近付いて来る。かなりの巨漢だが、鍛えられた体躯は躍動感に満ちていた。まるで月夜に野生の虎と遭遇した気分だ。
「……あ、あいつも《ジャック・ザ・ナイトメア》か？」
「違います。見覚えがある。メリーウェザーの屋敷に現れた三人組の一人だ。この男はおそらく、モリアーティの腹心です」
「なんだと！？」

「そう言うお前は、あのときのニッポン人か。アーサー・ホームズの隣人だな。てっきり《沈黙館》の手の者かと思っていたが、この場にいるってことは違ったらしい」
男はそう言って、ゆっくりと笑みを湛えた。
すると、どこからか銃声が聞こえてきた。しかも撃ち合っている。ということは、アーサーへの発砲ではない。
《ジャック・ザ・ナイトメア》とモリアーティたちの戦いが始まっているのだ。
「……軍の訓練でもないのに、こんなに銃声を聞こうとはな……」
「豪勢だろ？　と言っても、数は知れてるんだがな」
そう言う男の肩にも、一挺のライフル銃が担がれている。男はさらに二人に近付き、銀助もピクッと細かく反応した。
男は右足を微かに引きずるような歩き方をしていた。何か障害があるのかもしれない。もっとも、男のウェイトと鍛え方を見るだけで、それが大したハンデにならないことは予想できた。第一、男は銃で武装しているのだから、ハンデも何もあったものではない。クラウスは慌てて、さっき落とした拳銃を探した。
「……い、いや待て。銃があるのに姿を見せたってことは、敵対する気はないのか？　銀助。刺激するなよ」
「……正直、向き合ってるだけで、かなりの刺激的ですよ、あの人……」
銀助は軽口を叩いたが、その横顔は張り詰めたままだ。男もまた、両目を細めて値踏みするように銀助を見つめている。
「……貴方一人と言うことは、今回はモリアーティ氏はお留守番ですか？」
「大人しく留守番してくれるなら、こんなに助かることもないんだがな」
「別行動ですか？　大将の側を離れて、ずいぶん大胆不敵ですね」
「まあ、適材適所って奴だ。それに、手は足りてるからな。俺が少々サボったところで、なんの問題もない」
男の飾らない物言いは、嘘のようには思えなかった。だからこそ、クラウスはハッと気がついた。
ライフル銃。それに、男はウォータールー兵舎から現れた。
ウォータールー兵舎には二つの側防塔がある。その高さはホワイト・タワーの尖塔部には及ばないがーー
「銀助！　任せていいか？」
「警部っ!?　……ぐっ、でも……そうですね……誠に遺憾ながら、その方が効率的ですね、遺憾ながら」

もの凄く嫌そうな顔で、見るからに不承不承、銀助が承諾する。クラウスは男の表情をうかがい、なんの変化もないのを確認してから、そろりと後ろに下がった。
落とした拳銃を拾う。そして……城壁から垂れ下がったままのロープの元へと駆け寄った。
制御装置を操作し、《Eロール》の鉤爪を車輪に収納。それから車輪を回転させると、胸壁を乗り越えた《Eロール》が、ロープを巻き取りながら城壁から落下してきた。
「うおっ」
慌てつつ両腕で《Eロール》をキャッチ。それを抱えたまま、クラウスは礼拝堂の裏から中庭に向かう。
思わぬ事に、中庭では戦いが終わっていた。アーサーの乗る自動機巧人形（アウトマタ）が立っているだけで、《ジャック・ザ・ナイトメア》たちの姿がない。おそらく、モリアーティたちが侵入した合図を受けて、一度撤収したのだ。好都合だった。
走るクラウスの口から、白い息がもれる。
クラウスは大きく息を吸い、
「おおいっ、アーサー！」

＊

ピューイッ！

その特徴的な笛の音を――合図を聞いた瞬間、ジャックはハッと我に返った。
「チッ。来たか。……ミスター・ワトソン。こちらに」
舌打ちし、ジャックは窓から離れた。コナンはとっさにジャックを目で追った後、素早く窓を振り返る。
「……！」
自動機巧人形（アウトマタ）を包囲していた《ジャック・ザ・ナイトメア》たちが、一斉に走り出していた。アーサーを残し、全員がホワイト・タワーへ入ってくる。
いまの合図を聞いたからだろう。ジャックは「来たか」と言った。それが「誰」かは確認するまでもない。つまり彼らは当初の予定通り、ホワイト・タワーで「敵」を待ち受けるつもりなのだ。
おそらく、クラウスと銀助の元に向かった隊員も、この合図は聞いているはずだ。ならコナンもこの隙に、せめてもの合図をアーサーに送りたい。だが、声を出せば気付かれる。コナン

はポケットに手を入れ、自分がここにいる証として、ピーコンの発信器を窓の外に投げた。
ジャックが足を止めて振り返ったのは、その直後だ。
窓から離れないコナンに苛立ちを隠そうともせず、
「ミスター・ワトソン。逆らうようなら……ええいっ、時間が惜しい。いいでしょう。彼らの命は保証します」
「……《嚮主》の名に誓って？」
「来いっ！」
怒号がビンッと室内の夜気を震わせた。
命の保証も何も、隊員たちはアーサーを放置して配置に戻った。ジャックにとって想定する敵は、あくまで「裏切り者」のみ。アーサーたちなど眼中にないのだろう。
コナンはせいぜい太々しい微笑を作ると、黙ってジャックの後に続いた。
ジャックが向かったのは階段だ。そこに置かれている物に、コナンは顔をしかめた。
「……なんだ、この樽は？」
元々置かれていた物とは思えない。ジャックたちが持ち込んだのだろう。
「……油ですよ。籠城戦には付き物でしょう」
ジャックは素っ気なく告げたあと、コナンの予想に反し、階段を上に上りだした。
「下で待ち受けるんじゃないのか？」
「屋内だと合図が聞こえない危険がありますからね」
「さっきの笛か？　だが、隊員たちはみんなタワーに入った。屋上だと逆に……そうかっ。他にもいるんだな？」
「ご名答です。今回は普段現場に出ない《ジャック》たちにも動員を掛けています。あの笛は暗号通信のようなもので、かなりの情報量を伝達することができる。彼らは私の目であり耳なのです」
「……だが、笛で『伝達する必要』はあるんだな。以心伝心とまではいかないらしい」
コナンの挑発的な言い様に、ジャックが足を止め振り向いた。
二人の視線が交錯したが、もうコナンは恐れなかった。
「私の《ギアス》がどんなものか気になりますか？」
「どうやら他人事じゃなさそうだからな」
「すぐにわかりますよ。すぐにね」
そう言って、ジャックが冷笑を浮かべたときだ。微かに銃声が聞こえてきた。
塔内からではなく、外から。いまジャックが開かした見張り役の《ジャック・ザ・ナイトメア》たちが、侵入者たちと接敵したのだ。

「始まったみたいだな」
「……ええ。せいぜい楽しみましょう」
ジャックが再び階段を上る。コナンは彼の背中をにらみながら、その後に続いた。
いよいよ両陣営の戦闘だ。アーサー、それにクラウスと銀助の安否が気に掛かるが、いまは祈ることしかできない。
ホワイト・タワーはほぼ立方体に近い形の城塞だ。屋上は広く、四隅を尖塔に、四辺を胸壁に囲まれている。この付近ではもっとも高い建造物のため、ロンドン塔の敷地内はもちろん、テムズ河の向こう岸やロンドンの中心であるシティをも見渡すことができた。
ジャックに続いて尖塔から屋上に出たコナンは、いきなり開けた広大な夜空に圧倒された。
暗いのに澄んだ濃紺色の空と、天空に輝く眩い月。月明かりを浴びる上空の雲が、明るい白と影の灰色に色分けられている。小さな窓に切り取られた夕空とは異なる、ダイナミックな風景だった。
もっとも、雄大な景色に見とれている暇はなかった。屋上に出ると、さらにはっきりと銃声が聞こえてくる。また、銃声には《ジャック・ザ・ナイトメア》たち笛の音も混じっていた。ロンドン塔内に潜んでいた見張りたちからの「報告」だろう。
ただ、どこから侵入しているとしても、このホワイト・タワーに入るためには、中庭を横切らねばならない。塔内に戻った隊員たちの監視を掻い潜るのは困難なはずだ。
上空は風が強いのか、ふと、月が雲に隠れた。
屋上が薄暗くなる。
「……このまま向こうが現れるのを待つのか？」
薄闇の中で目を凝らしながらコナンが尋ねた。
だが、返事がない。「ジャック？」とコナンはジャックの方を振り向く。そして気がついた。
ジャックの背中が驚愕に強張っている。
なぜだ、と思ったとき、コナンはジャックの向こうにー屋上の真ん中に、人影が立っていることに気付いた。そして、ジャックと同じように、全身を硬直させた。

「よりにもよって、ここを選ぶとはね。懐かしい。もう、十年か」
その人影は夜風に長い髪をなびかせ、ゆっくりと近付いて来た。隠れた月が再び顔を出し、ホワイト・タワーに月明かりを落とす。
「お招きを受けて参上した。いまは『ジャック』か。わざわざ招待したからには、もてなしに期待していいんだろうね？」

青白い月光の下、モリアーティは冷ややかに微笑した。

＊